

「年代」を捉えること 服部崇

私の大学時代の恩師・佐藤良明は著書『ラバーソウルの弾みかたービートルズから《時》のサイエンスへ』（岩波書店、一九八九）で六〇年代に関する「時代研究」を試みた。執筆当時は八〇年代であったので、六〇年代が八〇年代にどのようなつながっているのかを示そうとした。〇〇年代を捉えようとする際にはその前のあるいはその後の年代との連続点と相違点を見極める必要があるようだ。例えば、同書は、一九五五年のアレン・ギンズバーグの「吠える」、いわゆるビート・ジェネレーションに言及している（二六八頁）。また、八〇年代の終わりにあって同書は「ドラッグを合法化せよという声も、『70年代』に比べる」と、まったく冷えてしまっている（五六頁）と嘆いていた。

吉川宏志による「1970年代短歌史」の連載が「短歌研究」誌上で二〇二一年六月号より始まっている。吉川は七〇年代の短歌史を書く理由を「当時の歌集に深い愛着を感じるから」とするとともに、「五〇年の月日が過ぎた今、短歌史を書く時機は熟したのではないか」と書いている（一〇四頁）。「七〇年代を代表する歌集の中から、特によく知られている歌」を二十首挙げて、七〇年代の歌の特長を「歌の言葉のやわらかさや伸びやかさ」（二〇五頁）に求めている。吉川が挙げている歌の中から（勝手ながら）「心の花」の歌人の歌を再掲する。

・ サンド・バッグに力はすべてたたきつけ疲れたり明日のため
に眠らん
佐佐木幸綱『群衆』

・ 水中のようにまなこは覗りたりひかるまひるのあらわたなれ
ば
伊藤一彦『瞑鳥記』

・ 荒れあれて雪積む夜もをさな児をかき抱きわがげもの眠り
石川不二子『牧歌』

吉川がここで言う七〇年代の歌の特長は、七〇年代以前の歌との比較である。八〇年代以降の歌はさらにやわらかく伸びやかになっていくと言えるかもしれないからである。

本時評欄を執筆している現在、七月号から八月号までしか発売されていない。これらの号では七〇年代の短歌史の前史として六〇年代を取り上げている。七月号は「前史（1）〈前衛狩り〉とは何だったのか 1964～1965年」、八月号は「前史（2）前衛短歌批判と大学闘争 1964～1966年」と題されている。

・ 鯖のごとくカブト光れり われ叛逆すゆえにわれあれ存在理由
福島泰樹『バリケード・一九六六年二月』

八月号に引用されているこの一首について、「危うい世界と対立することにより〈我〉が生じてくるという感覚を、前衛短歌の文体を発展させながら、鮮やかに表現している」（二二二頁）と吉川が書いていて、納得させられるとともに、六〇年代と七〇年代の連続点と相違点を考えさせる良い指摘だと思った。

この連載を終えるころには七〇年代と八〇年代の連続点と相違点を考えさせる論を展開してほしい。要すれば、「1970年代短歌史」はゆつくりじつくりながく連載してほしい、というリクエストである。